



小林古径《勿来関》 1911(明治44)年頃 個人蔵

会 期／2026年10月10日(土)～11月23日(月・祝)
会 場／田辺市立美術館

明治から昭和にかけての日本画表現の近代化のなかで、古典を新しい時代の感覚をもって活かした格調高い作品を描き、不朽の評価を得ている画家、小林古径(1883～1957)の芸術を、歴史上の人物や物語を主題とした初期から中期にかけての作品に焦点をあててお伝えする特別展を開催します。

館蔵品展 近代日本画コレクション展



入江波光《杏咲く頃》 1926(大正15)年

田辺市立美術館蔵

会 期／2026年10月10日(土)～11月23日(月・祝)
会 場／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館

「小林古径－歴史と物語を描く－」展の開催に併せて、近代日本画の巨匠たちの作品を田辺市立美術館の収蔵品を軸にして紹介します。小林古径記念美術館の協力をいただいて、古径の作品を集積する展示室も設けます。

田辺市立美術館へのきもち③4

三月に入ってもまだ寒さを感じるよく晴れた日、田辺市立美術館を訪れた。入口まで行って、改修事中だったことに気付いた。いつもなら館内に入って展示作品を鑑賞して帰るのだが、今日は建物自体を見学してみようと、ゆっくり館の周りを一周することにした。

少し離れた位置から全体をながめて見ると、美術館はよく整えられた広い公園北側の一隅で風景に溶け込むように絶妙に配置されており、建物は宝珠をのせた寄せ棟造りを現代風に再解釈したような数棟が、不揃いに円を描くように連なり、そこに不思議な調和を醸し出している。近づいてみると、正面入口は平面にどっしりと建てられていて、右側に移動すると段差のある地形となり、そのままの地形を活かし大地から数本のしっかりしたコンクリートの柱で建物の中心部を支え、まるでいく本かの樹木の上に館が乗ったような、趣向をこらした「高床式状」に建物が立っている。

更に建物群の北側に歩みを進めると、奥まったところにあるバックヤードが目に入ってくる。そこからバックヤードに至る通路があり、私には、その通路の入口には塞の神がおられ、ここから先は異世界に通ずる路であると暗示しているように感じられるのである。その奥に真の異世界との境に天の岩戸ならぬ大きなシャッターが見えるが、何の違和感なく、まるで黄泉の国への入口のように設置されている。ここまで来ると正面入口の建物から順に、古代から神話の時代を遊るがごとくである事に気付く。続いて進んでいくと、空調設備などが収まっている建物があり、そこで今回のメインの工事がなされていた。

こうした状況を見て、自分も十年前に高山寺本堂の大改修を行ったことを思い出した。田辺市立美術館自体が大きなひとつの作品であるように、高山寺の本堂も大岡實という建築家のひとつの作品である。大岡實はもと文化庁技官で、のち横浜国立大学の教授を務め、京都栲尾の高山寺の収蔵庫も設計している。栲尾の高山寺といえば、国

広報紙ORANGEの歩み

本号で通算44号を数える田辺市立美術館広報紙ORANGEは、2005(平成17)年6月1日に第1号を発行しました。田辺市立美術館が開館して10年近く経ってからのことで、刊行のきっかけとなったのは、2005(平成17)年5月1日の市町村の合併に伴い、田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館が本館・分館として新たなスタートをきったことでした。それまでは、田辺市立美術館が手づくりで「美術館だより」を出していましたが、新体制の周知や二館の活動を一体のものとして伝えてゆくための媒体が必要だと考え、この広報紙が創刊されました。

紙名の「ORANGE」については、第1号の表紙に「紀南地方の陽光のもとから、新鮮で、かぐわしく、実り多い内容の紙面を刊行することを目標につけた」と説明があり、活動の発展への期待が込められています。

当初は試行錯誤しながらの編集作業で、発行のペースも定まっていませんでしたが、3年目からは現行の年2回の定期発行(4月・10月)になり、年度初めの4月発行号には年間スケジュールを掲載して、その年の展覧会開催予定を知っていただけるようにしています。また当初A3二つ折りだった紙面は、第17号(2012年10月発行)からA4縦半分の折り込みが付け加えられました。この折り込み部分に年間スケジュールを掲載したり、作品図版の載ったメモ用紙として使えるようにしたりするなどのアイデアを出して、切り取って使っていただけるように紙面を作っています。本紙の個性的な部分かと思います。

記事も展覧会の紹介といった定番のものだけでなく、美術館の活動に親しんでいたばかりの内容となるように、毎回編集担当者が悩みながら工夫してきました。第2号(2005年10月発行)から始まった

宝「鳥獣戯画」が伝わり、南方熊楠の友人だった土宜法龍師も住職をつとめた名刹である。昨秋、高山寺本堂が大岡作品としては初めての登録有形文化財に登録された。十年前の改修に当たっては、作品である建造物の意匠を損なわずに原型を守り、当時の設計者や施工者の思いを鮮明に残すよう、細心の注意を払って耐震補強設計と施工がなされた。そのため見た目には改修の手を加えたことがわかりにくい仕上がりとなっている。

美術館や博物館、そして社寺など、多様な文化財を保有する施設には、それらを末長く保存継承していく役目がある。それは地道な努力の積み重ねであるが、保存されてこそ次世代に受け継がれ、伝承されていく。今私たちが作品を目にしてその魅力に心打たれるのも、先人がきちんと保存してくれた成果である。

社会状況厳しい昨今、公立機関の維持にも多くの困難が立ちはだかる。そのような中で、このたび空調設備などの基本的な改修がなされ、他に類を見ない貴重な「脇村コレクション」をはじめとしたあまたの作品が、この先も安全に護られ保たれることに安堵し感謝している。

自然豊かな広々とした公園の一隅に溶けこむように存在する田辺市立美術館で心ゆくまで作品を鑑賞する、新装になってオープンする日が待ち遠しい。あと数か月、その日を楽しみに過ごすこととしよう。

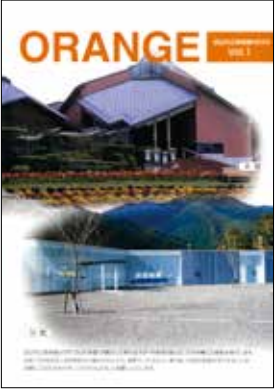


高山寺にて、愛猫のミーちゃんと

(高山寺住職・紀南文化財研究会会長 曾我部 大剛)

コラム「美術館あれこれ」では、「鑑賞について」や「著作権とは」、「インスタレーション」など、美術館の日常に関わるあれこれをお伝えして、第13号(2010年10月発行)までの全10回の連載となりました。現在も続く『絵画と出会う「この一点!」』は、第3号(2006年3月発行)から始まり、タイトル通りに展覧会の見どころとなる作品を1点選び、担当学芸員の「推し」を伝えています。外部の方に田辺市立美術館の活動への思いを綴っていただくシリーズ「田辺市立美術館へのきもち」は第10号(2009年4月発行)から始まりました。34回目となる今号には、田辺市内高山寺の住職で紀南文化財研究会の会長でもある曾我部大剛さんに、改修工事のことをふまえた「きもち」をお寄せいただいています(上に掲載)。この欄を振り返ったとき、本当に多くの方々が美術館の活動を見守り、支えてくださっていることを実感し、感謝の念を新たにしました。

広報紙ORANGEのバックナンバーは、すべて田辺市立美術館のホームページからダウンロードすることができます。ぜひこの機会に改めてご覧いただき、開館30周年を迎える当館の歩みの一端に触れていただけたら幸いです。



二館の建物が並んだ第1号の表紙紙名「ORANGE」の由来も記されています

(学芸員 知野 季里穂)

編集後記

改修工事による休館も残り6ヶ月となり、10月からの開館に向けた準備も進んでいます。開館30周年を記念した特別展から始まる今年度の展覧会スケジュールを、恒例となっている折込みにして掲載していますので、切り取っていただき、再開をお待ちいただければと思います。休館中にもORANGEを手にとって、お読みいただきありがとうございます。(F.O.)

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.44



朝井閑右衛門《山本太郎像》 1960(昭和35)年

田辺市立美術館蔵

作品介绍 朝井閑右衛門《山本太郎像》

朝井閑右衛門(1901～83)の晩年の制作を代表するものの一つに、詩人と学者を描いた一連の肖像作品がある。その端緒は、1960(昭和35)年の第14回新樹会展に出品された4人の詩人の肖像画であり、それぞれ、三好達治、草野心平、山本太郎、山崎栄治をモチーフとしている。いずれも朝井の親交のあった詩人たちだが、三好、草野、山崎が朝井と同世代で、すでに文壇で名の通った人物であったのに対し、山本だけがまだ三十代半ばで、数年前に2冊目の詩集を出したばかりの新人であったことは注目すべきことであろう。本作はその山本を描いた作品である。

1954(昭和29)年に最初の詩集『歩行者の祈りの唄』を刊行して、詩人として知られるようになった山本だが、父親が洋画家の山本鼎であり、美術雑誌『アトリエ』の編集部に勤めていたことで、画家の間では親しい存在であったことだろう。また母親の兄が詩人の北原白秋であることも周知の事実であったはずである。

本作に描かれた山本の後ろにいる黒眼鏡をかけた天使の姿の人物が、最晩年に眼病を患って失明に近い状態となり、1942(昭和17)年に亡くなった白秋であることは、当時は説明不要のことであったに違いない。三好や草野らに先立つ近代詩の巨匠と、その後の現代詩の領域を切り拓こうとしている新人を一つの画面に構成し、詩人の肖像画シリーズに組み入れて発表した朝井の絶妙な構想をも本作からはうかがうことができる。

(学芸員 三谷 渉)

周年の記念展

田辺市立美術館(本館)の開館は、1996(平成8)年11月1日です。この日から「開館記念展」として「開花・隆盛期の文人画家と紀州の三大文人画家」と「日本近代洋画の諸相」の二章からなる特別展を開催して皆様をお迎えし、その後30年の月日が経過しました。

この間、5年ごとの周年に記念展を開催して節目としてきました。当館では開館10周年のときから、それまでの作品収集活動の成果を紹介するコレクション展を、テーマを絞った記念の特別展とともに開催することを定例にしています。これまでの開催を順に挙げると、『コレクションの歩み展』(2006年、特別展は「水彩画の近代」・「日本画の個性」・「表現主義の流れ」・「写実と抽象」の四部で開催した「近代日本絵画の諸相」)、「脇村義太郎と禮次郎 珠玉のコレクション」(2011年、特別展とも兼ねて開催)、「田辺市立美術館開館20周年コレクション展」(2016年、特別展は「昭和の洋画を切り拓いた若き情熱 1930年協会から独立へ」)、「開館25周年 コレクション展」(2021年、特別展は「祇園南海」、「桑山玉洲」、「野呂介石」の三部で開催した「きのくにの三画人ー脇村兄弟のコレクションとともにー」)となります。記念の特別展も、開館当初から活動の基軸となっている、日本近世の文人画ないし日本の近代絵画をテーマにしたものを行い、当館の特色と活動の蓄積をアピールすることを周年の事業の主眼としてきました。開館30周年の今年度も、特別展「小林古徑ー歴史と物語を描くー」と「近代日本画コレクション展」を同時に開催してスタートし、以降「現代絵画コレクション展」、「文人画コレクション展」を追って実施してゆきます(今号の折り込みにスケジュールと概要を掲載しています)。

美術館の活動は展覧会が最も目立つ部分ですが、それと並行して行っている、作品や資料の収集と保存も活動の基本となるものです。当館の

収集活動は開館前から始まり、今回のように工事で長期の休館をしている間も継続しています(右の欄に昨年度の収集活動を報告しています)。そして、この展覧会活動と収集活動を支える根幹が、作家や作品等についての調査と研究です。展示と普及、収集と保存、調査と研究、この三つをいかに結びつけて連動させ、成果をあげてゆくかに腐心し続けてきた開館以来の30年でしたが、このことは今後も変わりなく続くものと思います。

連綿と続いてゆく美術館の活動を振り返り、築いてきたものを皆様にお伝える機会として、周年に開催する記念の展覧会は好個なものだと考えています。ご注目いただけましたら幸いです。



開館記念展のチラシ

ここから30年が経過しました

(学芸員 三谷 渉)

改修工事が進んでいます

昨年の秋から本格的な作業が始まった田辺市立美術館(本館)の改修工事も、いよいよ山場を迎えています。設備棟内の空調機を始めとする機器を一新することが今回の工事の大きな目的ですが、まずは古くなった既設の設備の取り外しを順に進めています。大型の機械類はクレーン車で吊り上げて搬出したり、設備棟内で分解したうえ、外壁を一部取り壊して運び出したりするなど大掛かりな作業も続けました(左の写真)。

この間に、展示室の壁の補修や展示ケースの照明をLEDに交換する作業の他、故障していたエントランスホールの空調機の入れ換えといった館内の工事も進行了ました。また、玄関周りの塗装を新たにするなど



古い機械をクレーンを使って取り出しました



玄関周りの塗装等を行いました

2026年2月4日撮影

の外観にかかわる工事も行っています(右の写真)。

4月からは新しい機器運び入れて設置し、配管、配線などの工事を進めてゆきます。その後試運転をしながら作動や機能を確認して工事は完了となりますが、すぐにオープンというわけにはいきません。収蔵庫や展示室といった作品を扱うスペースの温湿度の維持や空気環境に問題がないかをチェックしたうえで、熊野古道なかへち美術館(分館)に移して保管している収蔵作品を再び本館に戻す作業が残っています。作品を本館に運んだ後も、それらを収蔵庫に入れる前には燻蒸(ガスを使って付着している虫を殺す作業です)を行う計画ですので、搬出のときよりも一層の手間と日数を要します。

このように、まだまだ様々な過程が残っていますが、並行して開館30周年を記念する特別展の準備も着々と進めていますので、あと半年の間、ご期待いただきながら再開をお待ちいただければと思います。引き続きの皆様のご理解をお願いいたします。

(学芸員 三谷 渉)

新収蔵作品について

昨年度は、2点の作品を購入し、16点の作品をご寄贈いただきました。

購入した作品の一つは、近代の洋画家、朝井閑右衛門(1901～83)の《山本太郎像》(1960年／5.5.7×45.4cm／額装)です。2012(平成24)年度に横須賀美術館と共同で「没後30年朝井閑右衛門展」を開催したときには、出品がかなわずに残念な思いをした記憶のある作品ですが、それから20数年を経て当館が収蔵することになりました。朝井晩年の制作をよく伝える貴重な作品です。※今号の表紙に作品紹介を掲載しています。

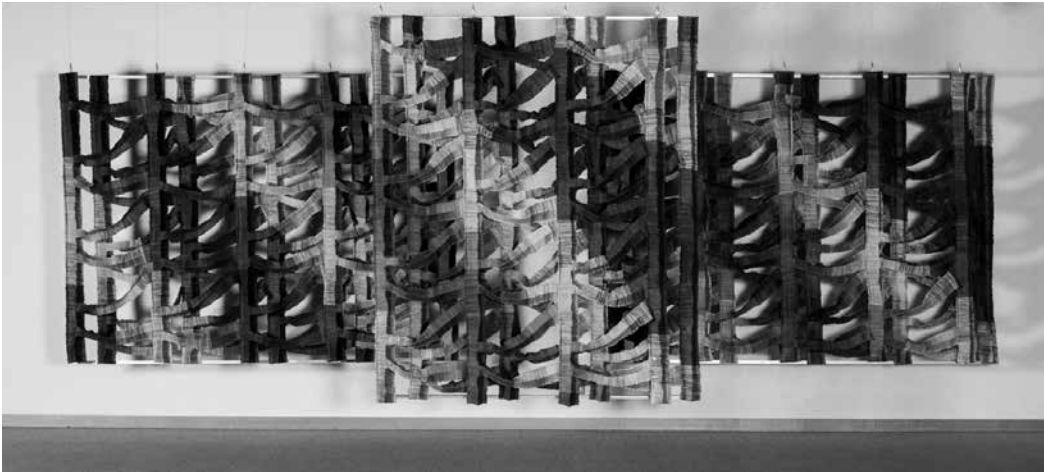
もう一つの購入作品は、久保田繁雄(1947～)の《Bright Forest Series I・II・Ⅲ》(2023年／210×570(可変)×d.60cm／タピスリー)です。※下の図版 織による新しい造形表現のパイオニアとして、国際的に評価されている久保田の作品はこれまで積極的に収集を進めてきましたが、本作を収蔵することによって、最新の制作までを見通すことができるようになりました。また久保田氏からは、イギリスでの滞在制作の成果である《Echo of The Wind VI》の他、手元に残しておられた最初期から近年までの重要な作品6点をご寄贈いただきました。これによって、当館の久保田作品のコレクションは全国の美術館の中でも有数のものとなっています。加えて同じく織の造形作家である、熊井恭子氏(1943～)からは、自作の《立ち竦む風》の他、自身が所有されていた、M.アバカノヴィッチ(1930～

2017)とP.コリンウッド(1922～2008)の作品をご寄贈いただき、当館の織の造形作家の作品群は、一段と厚みを増しています。

上記以外にも、近代の文人、脇本楽之軒(1883～1963)の軸装作品、昨年度特別展を開催した日本の抽象絵画の先駆者、村井正誠(1905～99)の油彩画、既に収蔵している野田裕示(1952～)の初期作品に関する素描のご寄贈のお申し出をいただいて収蔵しています。※寄贈作品の詳細は下の表

昨年の6月上旬から、当館は大規模な設備改修のために長期休館していますが、美術館の基本的な活動の一つである作品の収集は継続しています。ここに記しましたように、休館中にも一層のコレクションの充実を成しえたことは、これまでの活動の蓄積と、それを認めていただいた方々からのご寄贈があったからに他なりません。平素から当館の活動にご理解と、ご支援をいただいています皆様方に、この場をお借りして改めて深い感謝の念を表します。

(学芸員 三谷 渉)



久保田繁雄《Bright Forest Series I・II・Ⅲ》 2023(令和5)年

昨年度寄贈作品

	作者名	作品名	制作年	材質／形状	寸法(cm)
1	久保田繁雄	樹	1969(昭和44)年	綿、ウール／タピスリー	160×170
2	久保田繁雄	The Conversation	1978(昭和53)年	和紙、綿／タピスリー	200×180
3	久保田繁雄	Echo of The Wind VI	1997(平成 9)年	苧麻、サイザル麻／タピスリー	150×470
4	久保田繁雄	Shape of Green Ⅲ	2010(平成22)年	ナイロン、サイザル麻、苧麻／タピスリー	(各)160×110×d.10
5	久保田繁雄	Shape of Green IV	2012(平成24)年	ナイロン、サイザル麻、苧麻／立体	140×140×h.157
6	久保田繁雄	炎音Ⅱ	2018(平成30)年	苧麻、サイザル麻／タピスリー	220×240×d.25
7	熊井恭子	立ち竦む風	2004(平成16)年	ステンレススチール線／立体	(各)h.130×φ30～50
8	マグダレーナ・アバカノヴィッチ	フェイス	1982(昭和57)年	インク、紙	32.0×23.0
9	ピーター・コリンウッド	(無題)	不詳	化学繊維／タピスリー	168×52
10	脇本楽之軒	笑容図	1946(昭和21)年	紙、墨／軸装	32.3×45.7
11	脇本楽之軒	山水図 倣守景	不詳	紙、墨／軸装	87.6×31.6
12	村井正誠	顔	1962(昭和37)年	油彩、カンバス／額装	72.7×60.8
13	野田裕示	WORK 52 素描	1975(昭和50)年	水彩、鉛筆、紙	(各)36.5～76.5×28.0～56.5
14	野田裕示	WORK 56 素描	1976(昭和51)年	水彩、鉛筆、色鉛筆、紙	76.0×56.5
15	野田裕示	WORK 57 素描	1976(昭和51)年	水彩、鉛筆、紙	56.5×76.0
16	野田裕示	WORK 67 素描	1977(昭和52)年	水彩、鉛筆、ビス、紙	76.0×56.5

2026年度展覧会案内

1. 開館30周年記念特別展

小林古徑 ー歴史と物語を描くー

会場／田辺市立美術館

会 期／2026年10月10日(土)～11月23日(月・祝)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし10月12日・11月23日は開館)

10月13日(火)・11月4日(水)

館蔵品展

近代日本画コレクション展

会場／田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館

会 期／2026年10月10日(土)～11月23日(月・祝)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし10月12日・11月23日は開館)

10月13日(火)・11月4日(水)

2. 館蔵品展

現代絵画コレクション展

会場／田辺市立美術館

会 期／2026年12月5日(土)～2027年1月24日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし1月11日は開館)・1月12日(火)

12月29日(火)～1月3日(日)

田辺市立美術館の比較的新しいコレクションに、日本の戦後から現代にかけて展開した新しい絵画があります。そして近年では当館の収蔵品の特色の一つともなっている、高度な織の技術を用いた独創的な作品によって、現代の表現を切り開いている織作家たちの作品群があります。開館30周年の機会に、最近厚みを増している当館のこれらのコレクションを紹介する展覧会を開催します。

3. 館蔵品展

文人画コレクション展

会場／田辺市立美術館

会 期／2027年2月6日(土)～3月22日(月・祝)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし3月22日は開館)

2月12日(金)・2月24日(水)

田辺市立美術館には、当市出身の実業家、脇村禮次郎氏(1904～88)の収集した日本近世の文人画を主とする作品が、公益財団法人脇村奨学会から寄託されています。それらの作品を軸にした文人画のコレクションと展覧会の開催は、開館当初から当館の特色として知られてきました。開館30周年を記念して、改めて脇村禮次郎氏のコレクションを主にした、文人画の楽しさを伝える展覧会を開催します。

■くまびで作ろう!④

会場／熊野古道なかへち美術館

講師のアーティストと一緒に作品を作るワークショップを開催し、その成果を展示する「くまびで作ろう!」の4回目。今回は、絵画と造形についての思考をもとに、独自の抽象表現を追求し続けている野田裕示(1952～)を講師に迎えます。